

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節祈祷会

エベト・ヤハウエー

――イザヤ書第42章1～4節、53章3～5節――

1976年12月19日

小池辰雄

どこで倒れてもキリストの中 エホバの僕 絶対者の僕が本当の自由 キリスト・イエスの僕
神の僕になれば神の子にされる 天道に即した地路をゆく 一極絶対であれ 私はお前の中に
いるぞ！ 僕はみ霊が与えられているひと 祈り

【イザヤ42】

1 わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ、
我わが霊をかれにあたえたり。
かれ異邦人に道をしめすべし。

2 かれは叫ぶことなく声をあぐることなく
その声を街頭にきこえしめず。

3 また傷める蘆をおることなく
ほのくらき燈火をけすことなく、
真理をもて道をしめさん。

4 かれは衰えず喪膽せずして道を地にたておわらん。
もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。

【イザヤ53】

3 かれは侮られて人にすてられ、
悲哀の人にして病患をしれり。

また面をおいて避ることをせらるる者のごとく侮られたり。
われらも彼をとうとまざりき。

4 まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。
然るにわれら思えらく

彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。
彼はわれらの愆のために傷けられ、

われらの不義のために碎かれ、
みずから懲罰をうけてわれらに平安をあとう。
そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり。



●どこで倒れてもキリストの中

私にとりまして、今年はいろいろなことがありました。ヨルダン会〔20～30才代の青年男子の会〕の諸君の半数がこの集会から去って行った。私はなぜだか全然わからん。あれくらい私を信頼し、また私も彼らを信頼していたのに、どういふことかと。二人の青年が手紙を寄りましたが、その手紙の内容も私のこの福音の真意を受けとっていない。非常に残念であります。ガリラヤ会〔40～50才代の壮年男子の会〕の諸君も非常に嘆いていると思います。やはりユダ的な精神がはたらく。霊的なものにひかれるとあぶないんです、スエーデンボルクとか何とかいつて。そうするとヘタすると霊的傲慢になる。

私はこういうことを今日は言うまいと思っていたんだけど、つい爆発しました。ここに来ているU君も同僚として痛んでいるに相違ない。まあ帰ってこなくなつていい。彼らが本当にどこかで魂が電信柱にぶつかつて火でも発して、そして気がついて、それでキリストのもとへ戻ってくればいいんだ、本当の意味で。そうすれば一向さしつかえない。私は相対的な現実がよくなるというようなことはひとつも思っていない。私の魂は絶対界を生きているんですから、相対的なものは問題にならない——人間だからもちろん相対界にいますけれども——どうぞ、皆さんは私のこの人間的でない本当の気合を受けとってもらいたい。

今日なんかも多少その現象がもう既にあらわれている。あなたの方の中じゃないよ。本当にこの唯一人者キリストにしがみつぎ、

「どこでぶつ倒れてもキリストの中だ」

というだけの、本当に図太い信仰の中に入らないと、いろいろな現象でもつてゴタゴタゴタする。いいですね。

それでは、最後の祈祷会で本当にキリストの、御霊のキリストの誕生を私たちの腹の中に受けとる、ということでききましょう。

●エホバの僕

旧約聖書のイザヤ書は旧約聖書の最高のところで、これはキリストの預言とみるよりか仕方がない。イザヤ書42章。「エホバの僕^{しもべ}」は、

「エベト・ヤハウエー」

といいます。ヤーヴェーの僕、在りて在らしむる者の僕。

「在りて在らしむる者」

という訳し方は世界中に私ひとりです。「在る」ことが私たちを在らしめてありたもうところの「在る」という在り方。その僕。

「わが扶くるわが僕^{しもべ}わが心よろこぶわが撰人^{えらびびと}をみよ、

我わが霊^{みたま}をかれにあたえたり。



かれ異邦人に道をしめすべし。

2 かれは叫ぶことなく声をあげることなく

その声を街頭にきこえしめず。

3 また傷める蘆をおることなく

ほのくらき燈火をけすことなく、

真理をもて道をしめさん。

4 かれは衰えず喪膽せずして道を地にたておわらん。

もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。

素晴らしい句ですね。文語訳聖書が、詩的な段落になっていないのが、私は惜しくてしょうがない、なぜこれを組み直さないかと思つて。口語訳は詩的〔な段落〕になっているけれども。そんなところで頁数をケチケチして、せつかくこんな名訳ができてゐるのに。どうしてそういうことか感覚をもたないかと思う。「一遍組んだらお終い」なんて、そんなものではない。

「わが扶くるわが僕」

という。キリストはこのイザヤ書42章1～4節ないし9節、それから49章の1～6節、50章の4～9節、52章の13節から53章の12節——これはほとんど53章のことですが、これがクライマックスですけれども——この4つのところは

「エホバの僕の歌」「エベット・ヤーヴェー・リーダー」

とドイツ語でいつていますが。「主の僕の歌」です。暗記している人は暗記したらいい。

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人」

という。「僕」は即ち「選び人」である。この対句でいつてゐる言い方はよく氣をつけてください。それは同じ内容を別な表現でいつてゐる。一つの表現では言い切れないから。

「汝はわが愛しむ子なり、われ汝を悦ぶ」

という声が、洗礼のヨハネからバプテスマを受ける時に、キリストに響いてきた。これが即ち「わが悦ぶ僕、わが選び人」です。私たちが、皆さんが「選ばれてゐる」ということは、キリストの、

「神の僕とせられてゐる」

ということですよ。キリストは神の子です。それは本質の上から神の子です。しかしながら、存在の上からいうと、使命からいうと、神の僕なんです、キリストは。だから、

「私の意ではありません。あなたの意をどうぞ成してください」

といつて、僕になって、神の命令にこれ従つてゐる。キリストは神の声に、

「はい。はい」

といつて従つた。「それでも」なんていつて、デモ、行進はひとつもしない。

今の若い人は、「自由、自由」と言うけれども、本当の自由を知らない。身勝手なんだ。



今の人の自由というのは「身勝手」ということ。自分の身に囚われている。自我にとらわれている。その身勝手ないわゆる自由から抜けなければ、本当の自由の世界にこない。

●絶対者の僕が本当の自由

では、どうしたら本当の自由の世界にくるかというと、僕になることです。神の、絶対者の僕にならないければ、本当の自由はこない。これが、パウロが旧約聖書のこの「エホバの僕」のところをつかまえ、そしてマルチン・ルターがこのパウロの書簡からそいつを受けとったのが、いわゆる『クリスチャンの自由』という本です。

「キリスト者は自主なるものにして、何ものにも依存しない」という言葉と、

「キリスト者は僕なるものにして、一切のものに依存する」

という、外側は矛盾した二つの命題。これは決して矛盾しない。神の僕となったら、絶対者の意志が入ってくるから、これは絶対的自由の世界に入る。自分がぬけているから。ぬけていなければダメですよ。みんなぬけないような顔しているからね。本当に、こいのぼりの鯉みたいにお腹はぬけちゃつていなければ。空腹だと霊が入ってくる。

だから、断食はいい。断食の祈りをする、ものすごくなくなってくるのは、これは自分の中が空っぽになってくるから、キリストの霊が入ってくるから。まあたまには断食もしてみてください。

自分のいわゆる自由に死ぬと――ヒルティの詩の中にもあります、

「自由に死んで本当の自由に生きる」

という詩が――それが本当に、自主自由ということです。この自主とか自由というのは実は、本当の主体はこっち「神・キリスト」にある。こっちが主で、私たちは客なんです。キリストの客体となったときに、神さまの客体となったときに、本当に自主になる。

だから、マルチン・ルターが「奴隷意志論」と言った。奴隷意志になったときに、本当にそれが自由意志である。手放してもって自由意志を叫んだのがあのエラスムス、当時の人文主義者の第一人者です。いわゆる人道主義的な哲学ならエラスムスの言っていることは真理です。けれども、もうひとつ次元の高いところからいうと、エラスムスの言っているのはダメで、マルチン・ルターが本当の世界です。だから、ルターは、

「ナイン！ そうじゃない」

と言った。あの「奴隷意志論」をそのために、エラスムスに対して「然らず！」といって、書いたのがルターです。

本当の近世の自由の鐘を鳴らしたのは、奴隷意志を叫んだルターです。だから、もし「自由」というなら、マルチン・ルターに戻らなければ。宗教改革に戻らないで、自由だの民主だのといったってダメなんです。もう日本人には分からないのが決まっているんだ、そこ



へ戻らないから。大学の先生でも哲学やっても、本当に聖書を読んでいないもの。ヨーロッパの精神文化を受けとるのに、聖書を読まないで何を言えるかというんです、文学でも哲学でも何でも。

人間のたましいは、いつも書いているとおり、「霊が止まる」と書く。神霊が止まるのを「^{ひと}霊止」

という。皆さん、本当にこの宗教の事態がいちばん根底で、これがなければどうにもならないということを本当にはつきりと告白してください。友人が何かいったら、

「ダメだ、そんなことでは」

と。キチガイに思われるくらいにならなければダメですよ。

「神のためには狂えるなり」

と、パウロは言った。もうふぬけなクリスチャンが多いから。あなた方が本当にその気合にならなければ、私はもう今夜にも「集会を」解散しちゃうよ。そんなことはないと思いますが。皆さんを信じています。

●キリスト・イエスの僕

そういう事態がこの「僕」ということです。パウロがローマ書という素晴らしい書簡を書いた。そのいちばん先を見てごらんさない、何と書いてあるか。ローマ書1章1節、

「キリスト・イエスの僕^{しもべ}、召されて使徒となり、神の福音のために選び別か

たれたるパウロ」(ローマ1・1)

と。「キリスト・イエスの僕」と、開巻第一の言葉がこれなんです。

「私はキリスト・イエスの僕だ」

と。これが驚くべき「パウロ神学」といわれるところの生きた神学の土台の第一声は、「私はキリスト・イエスの僕だ」という。本当に彼はキリストに参りました。ダマスコ途上で、ぶっ倒されました。あれだけの本当にひっくり返りをやって、

「私はキリストに参った!」

と。絶対に、降参しなければその世界に入れない。

「聖書の研究だ。ギリシア語だ、ヘブライ語だ」

と、そんなことではない。本当にキリストに、

「参りました!」

といって、平伏しかぶとをぬぐと、

「よしつ、お前を入れてやる」

と言つてくださる。アタマでいくらでつち上げて考えたって、絶対に聖書の世界には入れません。いわゆる神学を私の神学は笑いますから。

キリストがイザヤ書のこの「エホバの僕の歌」でつかまえたところは、まず「僕」という事態。



だから、キリストは、

「汝の意志を成させたまえ。どうぞ、私をおつかいください」

といって、彼は自分を挺身した。これが僕の祈りなんです。挺身している祈りですよ、自分を棄ててかかっている祈りです。だから、いちばん強いものが来る。あきらめて、

「どうぞ、なさってください」

なんていうのではない。

「わが望みは消えゆくとも」

ではない。

「わが望みは消えてゆけ。あなたの望みが成ってください」

と。神の栄光が現れることが讃美の讃美であるという。

●神の僕になれば神の子にされる

いつか祈祷会でU君がすごい異言の世界に入らせられた。そしてパウロの天界における祈りを聞いた。私のもっている最も大事なものの一つです、あれは。記念にとつてある。

「今、世界は悔い改めねば亡びる」

と。本当にそうですよ。この神に叛いている20世紀は本当に危険です。原子爆弾が怖いのではない。水素爆弾がこわいのではない。サタンに囚われている人間の心が恐ろしい。畏るべきものをおそれない傲慢な若い人たち——そうじゃないよ——教育に当たっている先生方が傲慢なんです、本当に平伏していない。日本の教育は、どんなに制度を変えたってダメです。だから、私は今年の1月の、「高等（教育）云々」という雑誌に、

「まず第一に教育者が平伏せ。校長さんたちは山に入って冥想しなさい」

と書いた。そういうことを言うやつがいらないんだからしょうがない。御霊の権威は何ものも恐れませんか。

これが本当に、

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人」

ということ。あなた方は神さまの御意を行う、行ずるために選ばれている僕であり——女の方なら——婢女である。

今、看護婦さんへの志望が非常に少なくなってきたという。女性が本当に人を助けようという気持がだんだん薄くなってきた証拠ではないですか。もちろん看護婦の待遇がわるいものだから、あれは困るということもひとつの相対的な原因でしょう。

それから、それに限らず、何でもすぐ賃金要求。悪循環ばかりやっている。堪え忍ぶことを忘れてしまった、日本人は。本当にまた思いやりを忘れてしまった。上の者が下の者を思いやらない。下の人が本当に忍ばない。お互いに思いやり忍んでいけば必ずよくなります。労使問題じゃないですよ、人間の問題なんです。日教組なんかとんでもない。まあ



どうも私は憤慨ばかりして困るんだけど、人間的な憤慨じゃないんですよ、正直。それで、その僕にどうしたかというと、

我わが霊をかれにあたえたり。

と。「わが霊を与えた」という。私たちは本当に僕にされると、霊が来るんです。平伏せば聖霊が来るんです。平伏しないところには聖霊は来ない。ただ「祈り三昧」なんてなところで高揚したような気持になると、ヘタするとサタンに捕らわれてしまう。

本当に平伏しているならば、平伏して本当に

「主さま！」

と一言きけば、直ちに聖霊は来ます。……異言が出そうでしょうがない。そういう事態。これはもう、イザヤ書42章の第1節が、この1節だけでもってそのような福音がはつきりある。キリストは徹底的に神の僕となったらみ霊のひとつでありました。

み霊のひとつは即ち神の子なんです、今度は。

「アバ、父よ！」

と言える。だから、子であることが先ではない。僕であることが先なんです。本当に僕になれば、あなた方はまた神の子です。キリストはもっと大胆に言われた、ヨハネ伝で。

「お前たちは神々ではないか」

と言われた。驚くべき言葉です。神々である、私たち一人びとりが。それはそうだよ。神の霊が止まっているから、神質をいただいている者。もともと、

「神の似姿」

に創られている。

「エーベンビルト・ゴッテス」「セレム・エロヒーム」

という。神の似姿につくられている。質的に同質につくられている、本来は。その本来の性質を、質を回復してくださったのがキリストです。「パラダイス・レゲインド」〔楽園回復〕という。

●天道に即した地路をゆく

かれ異邦人に道をしめすべし。

という。「道」というのは、日本人が大好きな言葉であるはずなんです。いつも申し上げているとおり、日本人は道の民である。私のある歌の中にもあります、「道の民」と。理屈ではない。真理を身に体することを道といいます。弓道、柔道、剣道、合気道。道なんです、術ではない。書道、画道という。

棟方志功なんていうやつは、全く画道に燃えているような人だ。私は今度は志功の「女人観世音」という画を第二巻『芸術の魂』の巻頭に載つけた。裸の女性だからみんなびっくりしたかも知れない。志功というのは本当に神さまの傑作を「女人観世音」といった。



私たちは本当に神さまの前には一物ももたない。キリストの霊だけです。

²かれは叫ぶことなく声をあげることなくその声を街頭^{ちまた}にきこえしめず。³また傷める蘆^{いた}をおることなくほのくらき燈火^{ともしび}をけすことなく、

キリストはねんごろに語ったでしょう。しかしながら、ある時は叫びもしました。これは深い愛の消息をこういう表現で言ったわけでしょう、深い思いやりの。「思い遣り」というのは漢文の言い方でいうと「恕^{じょ}」という。

「孔子の教えもついにきわまるところは恕^{じょ}の一字であるか」

という。本当に今は思いやりがなくなってしまったね、都会人はことに。みんな身勝手にひとのことはどうでもいいと。しかし本当は、ちっともそれは幸いではない。

深い思いやりが、

「傷める蘆^{いた}をおることなくほのくらき燈火^{ともしび}をけすことなく」

と。「消すことなき」どころでない。逆に今度は、燃やしてしまう。傷める葦を今度は、傷まざる葦に変えてしまう。それが福音の世界です。

さっきの下田さんも、私の録音を聞いているうちに聖霊を受けてしまった。それで変わった。私に手紙をくださった。私はびっくりした。今日のご証言の通りです。また、あなたがよく見舞ってくださいました。

真理^{まこと}をもて道をしめさん。

そういう、道そのものです。

「我は道なり」

と言う、キリストは。神さまのただ一つのこの道をゆく。

『この道を往く』（獨協学園図書館リンデンバウム叢書2、1973年刊）

という本を私も書きました。道です。

奥田君の名前が「昌道」、昌^{さか}なる道だ。いい名前だね。「辰雄」なんかよりよっぽどいい。辰雄なんてヘタするとサタンになってしまう（笑）。東洋では辰（竜）は靈獣なんだよ、靈的な動物なんだ。聖書には「竜」なんていうと、黙示録というと悪いやつだ。

この道。しかしこれは天道であります。ただの道ではない。天の道です。

「天道をたておわらん」

という。それで、地上では地路^{ちろ}であります。この地面の上を各々の足で歩いていくのが「地路」という。地路が天道に、即しなければ本ものでない。あなた方一人びとりの歩く地路は、一人びとり、他の人とは歩くところはみんなちがう。その足跡はみんなちがう。同じであつたらダメですよ。みんなそれぞれの特殊性をもっていたらいいんだから。軌道にのつかって歩くようなことをしたらダメなんだ。歩かなくては。文明は少しいきすぎたね。



●一極絶対であれ

私は早稲田で降りて学校まで歩いて行く〔註：地下鉄東西線早稲田駅から目白台（関口三丁目）の獨協中高まで徒歩約25～30分〕。たいていみんな、新宿で乗り換えて目白駅下車、スクールバスに乗って行く、先生も生徒も。ダメだよ。私はテクテク歩く。冥想しながら歩いているからパツとくる。そしてポケットの中から手帳をだして書き入れる。何でも私はキリストを相手にして、パツと目覚めれば――「目がさめる」というのは何も眠りから覚めることではないよ――ありがたいですね、正直。でなければ、いきようがないものね。本当のところを歩いてないよね、魂が。それはわかるですよ、生きがわるくなるから、もしキリストを相手にしてないというと。

「キリストを相手にしている」

といったって、しょっちゅう「キリスト、キリスト」なんて、いわゆる意識的に思ったって、これはノイローゼになるよ。そういうことではない。

「私はまだ祈りが足りない」

だとかね、しょっちゅう自分を責めていたのでは。あなた方は意識して呼吸していますか。無意識に呼吸しているでしょ。無意識にキリストに生きる。

「右の手のすることを左の手に知らせるな」

というのは、

「一極絶対であれ」

ということ。右の手のすることも、右の手自身も知らないようなわけだ。

「いつ、あなたに善いことをしましたか」

「いや、この小さな者に水をのませたのは私にしたんだよ」

と。こういう人間が天国往きになる。パウロがやはりコリント前書13章で聖霊の愛のことを語った。

「愛は……、愛は……」

と。あの「愛は」という字は、「み霊は」といつてもいいし、「キリストは」といつてもいいんです。私たちが何か自分でもって身構えて、「愛は」なんていうものではない。

●私はお前の中にいるぞ！

4 かれは衰えず喪膽せずして道を地にたておわらん。

絶対に衰えませんが、絶対に氣落ちしません、どんなことがあっても。パウロが言っているとおり、

「^せ為んかた^{のぞみ}尽くれども絶対に希望を失わず」

と。望みは願望じゃないんだから、上から来るんだから。行き詰まれば行き詰まるほど、いよいよ素晴らしいことになっていく。始末のわるい人にならなければダメですよ、始末



のわるい人に。

「あの野郎はもうまいったか」

とおもったら、

「どついで」

と。「まいる」どころのさわぎではない。いよいよものすごいことになっていく。

今朝方だったかな、テレビをひよつと見ていたら、

「今の馬なんてものは鍛え方が足りない。問題にならない」

というようなことを、「競走馬の」調教師が言っていた。その通りですよ。

「鞍上人なく鞍下馬なし」

というような境地。それにはもの凄い訓練がいる。信仰の世界は訓練がいらないかとおもうと、そうはいかん。いわゆる訓練として、いわゆる努力はしませんが、ざるを得ない。神さまに鍛えられざるを得ないんです、いろんなことを通して。いろんなことにつかればぶつかるほど。ペテロが言っているではないですか、

「患難にあつたら、お前たちよろこべ」

と。ペテロ前書4章12節、

「¹²愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試煉を異なる事として怪しまず、¹³反つてキリストの苦難に与れば、与るほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び樂しまん為なり。¹⁴もし汝等キリストの名のために謗られなば幸福なり。栄光の御霊すなわち神の御霊なんじらの上に留り給えなり。」(ペテロ前4・12～14)

喜べるのは、栄光のみ霊が私たちの中に留まっているからです。患難にあえばあうほどいよいよ逆に強くなる。いつもニコニコしている。

「あの人はあんなにいろんな目にあっているのに、なぜニコニコしているんだろうか？」

と。もう次元のちがったところにいるからだ。本当ですよ、これ。例外ないです。四面楚歌の声で、たった独りになつても。

“Der Starke ist am mächtigsten allein.” (Schiller: Wilhelm Tell)

「強者は独りのとき最も強」

という。シラーの『ウィルヘルム・テル』の中の言葉です。

どうぞ、皆さん、男の人でも女の人でも、老いたるも若きも、み霊がくればそれだけの力があるんです。大丈夫です。

「主さまー」

と呼ぶ時に、直ちにわが、う、ち、な、る、聖霊をはっきりと意識する。

「お前の中にいるぞー」



と。向こう側ばかりではないですよ、中に居る。

●僕はみ霊が与えられているひと

イザヤ書53章3節、

「³かれは侮^{あなど}られて人にすてられ、

いいよ、人にすてられても。人にすてられると神さまに拾われるから。

悲哀^{かなしみ}の人にして病患^{やまい}をしれり。

この「悲哀」というのは、みんなの悲しみを、「ヴェルトシユメルツ」を、「世界苦」を自分で感じている。「ミットライデン」している。「苦しみを共に」している。

自分が悲しいのではないですよ。「悲しみの人」というと、無教会時代だと何かセンチメンタルな悲哀を感じたりする。妙な主義があつたものだね、無教会も。そんなこと言つてはわるいけれども。

「悩みを知れり」

という。人の悩みをやはり――恕^{じよ}です――思いやつて知っている。自分で痛みを感じている。共苦している。共に苦しんでいる。これはキリストだけが本当になさる。

また面^{かお}をおおいて避^{さぐ}ることをせらるる者のごとく侮^{あなど}られたり。われらも彼をとうとまざりき。

4まことに彼はわれらの病患^{やまい}をおい、我等のかなしみを担^{にな}えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。

まず素晴らしいことが書いてあるね、このイザヤ書の53章というのは。どうしてこんなことが書けるかと思う。この預言者自身がその「彼」というひとであるか、あるいは誰か他に「彼」というようない人物がいたか。キリストへのこれが預言になっている。

5彼はわれらの愆^{とが}のために傷^{きず}けられ、われらの不義のために砕かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安^{やすき}をあとう。そのうたれし瘡^{きず}によりてわれらは癒^{いや}されたり。」(イザヤ53・3～5)

これが贖罪^{しよくざい}のところですよ。

「われらの不義のために彼は砕かれ」

と。私の「砕けの神学」というのはここの、「砕け」という字からきたんです。キリストの砕けなんです。私たちの心の砕けではない。十字架のキリストはこの砕けを受けとつた。

詩篇51篇の「砕けたるたましい」というので、

「我々の魂が砕ければ云々」

なんて、それは相対的には結構でしょう。しかし、我々の魂の砕けなんてものは当てにならない、そんなものは。キリストの砕けを賜つて、本当に砕かれるんです。これが本当の



贖いです。

僕の道は十字架に通じていた。しかしながら、十字架を負えたキリストは最もすごい聖霊の人なんです。聖霊がなければ十字架は負えない。

我々はさつき讃美歌331番をうたいました。しかし、

「主のみ十字架を負わせまつり……」

と歌うけれども、これは本当にみ霊が来てなければこの歌は本当にはうたえない。

今日の午前の「まぶねの中に」の121番は最も好きな讃美歌のひとつですが、これは由木康〔註：由木康（1896/4/16～1985/1/27）は日本の牧師、讃美歌作家。日本の讃美歌の発展の中心的な役割を果たし、賛美歌「きよしこの夜」の訳者として知られる〕さんの傑作だね。由木さんはあの一つの讃美歌を作っただけで、もう存在の価値がある。由木さんの讃美歌の作者としての使命はあの一つの歌でもうとれたと言ってもいいくらいです。

あの「荒城の月」の歌〔土井晩翠作詞・瀧廉太郎作曲〕があるね。瀧廉太郎。あの一つの歌でもうそれでいい。たった一つの絶妙なるものを残していく。それでいいんです。

あなた方は、今度の『芸術の魂』（著作集第二巻 1976年刊）を本当によんでくださいよ。単に芸術のことをいつているのではない。完全に福音の世界から語っています。最大の芸術家は神さまなんですから。

本当にこの53章のこの言葉はもう読むだけでグツときてしまう。何といつても――悟りの世界ではない――本当の救いの世界です。これが力強いんです。

この53章のようなこういうエホバの僕は、み霊がきている。み霊が与えられているひと（霊止）である。それを忘れてはいかん。おわります。

● 祈り

祈ります。私が先に祈りますから、あとは自由に祈ってください。しばらく沈黙の祈り。

イザヤ書53章のキリスト、主さま。ふしぎな星が現れました。あなたはその星の徴に応じて、地上に馬槽の中に呱呱の声をあげてお降りになりました。あなたの地上の生涯は、あなた（神様）の、また天使の護りの中に進められてまいりました。あなたはこの天の神さまを「父よ」と呼んで、親しくそのみふところの中を歩いておられました。本当に、「ひと」（霊止）というの「神霊が止まっている」と奇しくもかかれているように、私たちも主さまのみ霊を私たちの中に止まらせてありたく存じます。

ヨハネ伝第15章にあるように、

「汝ら我に宿れ、我汝らの中に宿る」

と、そのようにあなたは私たちの中に宿ってくださいます。

「そうでなければ、どうにもならんぞ。しかし、私がお前の中にあり、私の言がお前の中に生きているならば、何でも求めてごらん。必ず成る」



と言われました。本当に主さまの聖言はひとつも水を割ることができません。もの凄い現実です。どうぞ、私たちはこの福音書——マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ——の御言、御業をそのまま100%に受けとって進ましめてください。一言、一言、「アーメン！」といって、本当に全身をもつて受けとっていきます。研究もヘッタレもありません。本当に感謝であります。そのようにして、私たちはあなたのみ霊を今日、今晚、ここにいただき、そして（異言）…この降誕節を迎えた本当の内実がここにあります。そしてどうぞ、あなたの御意になりますように。私たちを挺身いたしましたして、そこに本当にみ霊の自由があると、感謝いたします。天の法則に、霊の法則に、

「生けるみ霊の法^{のり}」

とパウロが言いましたが、このようにして自在に動いてまいります。

兄弟姉妹たちの中にこのようにして福音が、キリストが化体せられ、そしていよいよ1977年に向かって、それぞれあなたから希望をいただいて、突撃して行きます。どんなことがあっても、躓いても転んでも、前進あるのみであります。左顧右眄しません。まっしぐらに進みます。主さま、かくして本当に私たちは相たずさえて行きます。

今日は、京都では奥田君の群が朝から晩までやっているとおもいますが、どうぞいよいよ、神さま、彼らをまた祝福してください。また今橋君も大阪でやってきましたが、それはあなたのご栄光の現れとしてハレルヤに終わつたことを信じて感謝いたします。主さま、私たちはまた、そここの同信の兄弟姉妹たちもみな同じく、今日は讃えて進んでいることを信じて感謝いたします。

ああ、主さま、この日本の国はみな本当に精神的な危機にあります。教育がどうにもありません。どうぞ、このキリストに、福音に新しく入れられた人たちにこそ、本当の教育の責任がかかっていることを信じ、受けとり、そして使命を果たさしめてください。いわゆる先生が教育するものではありません。この福音をいただいた人たちが本当の教育を地道にやっています。どうぞ、この兄弟姉妹をそのようにお使いください。

かくして、私たちはイエス・キリストがあふれてくださるがゆえに、もはや何をか言わんであります。来年に向かって希望まんまん、洋々たる前途をいただきながら、進んできます。驚くべき力が来ました、驚くべき光が来しました。感謝、感謝。聖名を讃え奉ります。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名により捧げ奉る。アーメン。

